

ミシェル・フーコーにおける自由主義の問題 —パノプティコンから統治しやすいホモ・エコノミクスまで—

大 貫 恵 佳*

The Problem of Liberalism in Foucault's Theory: From a Panopticon to Governable Homo Economicus

Satoka ONUKI*

Abstract

In the contemporary society, neoliberalism and globalization are important matters to consider. Human activities are evaluated in terms of economic logic that assumes that the “freedom” of international economic activities increase the wealth of the global society as a whole. Social analyses conducted after 2000, however, have reported the negative effects of global neoliberalism.

This paper attempts to make clear that the “discipline” or “bio-politics” of Foucault's power theory should be understood in relation to liberalism and that Foucault's analyses of power take the problem of neoliberalism into consideration. With reference to Foucault's lectures at the Collège de France, I reconsider the problem of liberalism as the problem of power. Thereby I show that the logic of capital is not outside of power and is not something that is “given” or “natural.”

1. はじめに

新自由主義とグローバリゼーションは、現代社会を考える際に、避けて通ることのできない問題である。国民国家の枠を超えた「自由」な経済活動が社会全体の富を増大するという前提のもと、人間のあらゆる活動は経済の論理に包囲され、その観点から評価されるようになった。この傾向の端緒となったのは、一般に、マーガレット・サッチャーやロナルド・レーガンらの政策とされるが、もちろん、彼女／彼らが新自由主義を発明したわけではない。何か、もっと深く広範囲な変動がそれらを生み出しているに違

いない。2000年以降の社会分析は、こうした問題意識を共有している。

ジル・ドゥルーズが、アントニオ・ネグリのインタビューに応じて、管理社会の到来を告げていたのは1990年のことであった(Deleuze 1990=1992: 279-91)。限定された空間の内部で作動する規律の時代が終わり、空間を超える管理型権力の時代が来ていると彼はいつていた。規律社会と管理社会についてはすでに多くのことが語られてきたが、規律のメカニズムを初めに暴いたミシェル・フーコーの理論は、グローバリゼーションの時代には対応できないのだろうか⁽¹⁾。

*駒沢女子大学 人文学部 人間関係学科

いや、むしろ、フーコー理論は超空間的に作動する権力の問題を内包していると考えるべきだろう。

本稿は、主として自由主義について論じたフーコーの講義録にもとづき、フーコーが規律や生政治を自由主義の問題系のなかで捉えていたこと、フーコーの権力分析が、自由主義とそれに続く新自由主義の時代とを射程に入れたものであることを確認したい。新自由主義の時代にあって、私たちは身も蓋もない資本の論理に絶望するあまり、それを思考の外に置き去りにしてはいないだろうか。そのとき、資本の論理はしばしば権力の外部に想定される。しかし、フーコーはそれを徹頭徹尾権力の内部の問題として、「自然」でも「所与」でもないものとして捉えていた。彼の自由主義についての分析を精査することは、現代の新自由主義的グローバリゼーションを考える一助となるだろう。

2. ポスト・規律社会論

(1) フレイザーによる批判

フーコーのいう規律のテクノロジーは、国民国家を基盤としており、したがってそれは、そのままではグローバルな社会を説明するには適さない。こうした認識にもとづく「ポスト・規律社会論」は多々あるが、とくに、ナンシー・フレイザーは、規律をフォーディズムと結びつけ、「ミシェル・フーコーはフォーディズム型の社会規制の大理論家であった」(Fraser 2008=2013: 159)と断言する。

もちろん、フーコーは自らのプロジェクトをフォーディズム的規制の解剖学と理解していたわけではなかった。彼は自らの診断をより広い範囲に位置づけており、むしろ規律訓練的な権力を「近代」と結びつけようとしていた。……しかし……いまわれわれが新しい、ポストフォーディズム的なグローバリゼーションの時代の頂に立っているとすれば、フーコーはそのような観点からも再読されるべきである。彼はもはや近

代それ自体の解釈者というよりは、ミネルヴァの梟のように、フォーディズム型の社会規制の歴史的な衰退の瞬間に、その内在的な論理をとらえた理論家とみなされる。(Fraser 2008=2013: 159-60)

ここで「フォーディズム」とは、「第一次世界大戦から共産主義の崩壊までの『短い20世紀』」(Fraser 2008=2013: 162)に対応している。なかでも彼女が強調するのは、ブレトン・ウッズ体制に見られる「国家の線分に沿って組織された国際的な現象」(Fraser 2008=2013: 162)である。

フレイザーは、フォーディズム型の規律訓練の特徴として「全体化」「国家的フレームのなかでの社会的凝縮」「自己規制」を挙げる。「全体化」とは、「工場生産だけでなく労働者の家族やコミュニティ」(Fraser 2008=2013: 165)まであらゆる社会領域を合理的にコントロールすることである。しかし、すべての社会領域とはいっても、それは「国家的フレームのなかに社会的に凝縮されていた」(Fraser 2008=2013: 165-6)。フォーディズムにおいては、「社会的なものは国民国家と関連していた」(Fraser 2008=2013: 166)のである。そしてまた、フォーディズム的な社会統制は「内的な自己統治能力のある自発的な主体を促進」する(Fraser 2008=2013: 167)。

だが、彼女いわく、フォーディズム型規律訓練は今日ではもはや通用しない。「1989年後のポストフォーディズム的グローバリゼーションの時代になると、社会的相互行為ははだいに国境を越えるようになった」(Fraser 2008=2013: 169)。同時に、規制緩和と民営化によって「(国家的)社会的なもの」の解体(Fraser 2008=2013: 170)が進行している。また「社会化の仕事が市場化されるにつれて」、自己規制よりも「あからさまな抑圧」が優先される(Fraser 2008=2013: 170-1)。この新しい規制様式は、固定的な空間ではなくフレキシブルなネットワー

クにおいて作用すること、そこでの主体は規律的な自己ではなくフレキシブルな個人であることから、「フレキシビリゼーション」と呼べるものである(Fraser 2008=2013: 177)。

フレイザーの診断は、私たちの経験的な時代感覚と近い。しかし、超空間的でフレキシブルな社会規制が、グローバリゼーションやポストフォーディズムに起因するというのは一種のトートロジーではないだろうか。分析が必要なのはむしろこの先の部分である。すなわち、どのような知と権力の配置が、超空間的でフレキシブルな社会規制を可能にしたのかを問わなければならないのだ。トーマス・レムケが指摘するように、「政治と経済の関係の変容は、客観的な経済法則の帰結として探査されるべきものではなく、社会的権力関係の変容という観点から探査されるべき」である(Lemke 2003=2003: 47)。

(2) 〈帝国〉論

ポスト・規律社会論として、マルクス主義の観点からそれを論じたマイケル・ハートとネグリの〈帝国〉論を忘れることはできない。〈帝国〉とは、近代の国民国家システムを前提とした帝国主義とは異なり、脱領土的でグローバルな主権である⁽²⁾。

〈帝国〉は権力の領土上の中心を打ち立てることもなければ、固定した境界や障壁にも依拠しない。〈帝国〉とは、脱中心的で脱領土的な支配装置なのであり、これは、そのたえず拡大しつづける開かれた境界の内部に、グローバルな領域全体を漸進的に組み込んでいくのである。(Hardt and Negri 2000=2003: 5)

ハートとネグリの〈帝国〉論には、フレイザーの議論と重なる部分がある。彼らは、〈帝国〉の形成に向けた最初のステップを1930年代のアメリカに見る。すなわち、テーラー主義、フォード主義、ケインズ主義の「三位一体」(Hardt and Negri 2000=

2003: 316)による近代福祉国家プロジェクトである。この段階は「規律的統治の最高形態」(Hardt and Negri 2000=2003: 316)である。規律的統治とは、「社会がもつばら資本主義的生産の基準に則って徐々に、だが止めることのできない連続性とともに支配される」(Hardt and Negri 2000=2003: 316-7)ことを指す。したがって、「規律社会とは工場-社会のことなのだ」(Hardt and Negri 2000=2003: 317)。次のステップは第二次大戦後である。ニューディールのモデルがすべての資本主義諸国に拡大され、グローバルな規律的国家が形成される。「資本の観点からすると、このモデルが夢見ていたのは、ゆくゆくは世界中の労働者一人ひとりが十分に規律化されるようになり、グローバルな生産過程——換言すれば、グローバルな工場-社会とグローバルなフォード主義——のなかで互換性のある存在となる、ということであった」(Hardt and Negri 2000=2003: 322)⁽³⁾。最後のステップは、1970年代以降のフォーディズムからポストフォーディズムへの移行である。それは、モノの生産がコミュニケーション、サービス、知識の生産——ハートらの言葉でいえば「非物質的労働」(Hardt and Negri 2000=2003: 375)——へと移行する段階であった。「フォーディズム的な組織化と工業的大量生産の時代には、資本は特定の領土に縛りつけられ、したがって限定された労働人口と契約上の関係をもつことを余儀なくされていた。ところが生産の情報化および非物質的生産の重要性の増大は、領土と交渉という制約から資本を自由にする方向に進んできたのである」(Hardt and Negri 2000=2003: 382)。

かくして〈帝国〉が出現するのだが、ここまでの経緯は、フレイザーのいう規律からフレキシビリゼーションへの移行とほぼ一致している⁽⁴⁾。しかし、ハートらの議論は、フレイザーのものよりもフーコー的である。まず彼ら自身が明確に述べていることであるが、〈帝国〉論は、次の2点をフーコーに負っている。フー

コーの仕事によって、規律社会から管理社会への移行を認識することが可能になったこと、そして、管理社会における権力の対象が「人口を構成する住民の生全体」(Hardt and Negri 2000=2003: 41)となったこと、つまり管理社会の生政治的性質が明らかにされたことである。

さらに、本稿にとって重要なこととして、〈帝国〉論は以下の2点においてフォーコーと接近する。ひとつは、それが、抵抗を権力の内部に位置づけていることである。〈帝国〉論によれば、フォーディズムからポストフォーディズムへの移行は、資本家によってではなく、労働者によって「下から」(Hardt and Negri 2000=2003: 357)実現した。規律の普遍化と福祉の拡大と並行して生じたさまざまな社会的闘争が、結果として賃金の上昇をもたらした。また、それらの闘争は、固定的な工場での労働を拒否し、フレキシブルな生産諸形態を望んだのである。

もしもベトナム戦争が起らなかったなら、もしも1960年代の労働者と学生の反乱がなかったなら、もしも1968年とフェミニズム運動の第二波がなかったなら、もしも一連の反帝国主義闘争すべてがなかったなら、資本は自己の権力配置を変える必要はなかっただろうし、生産のやっかいなパラダイムの転換を行わずにすんでほっとしていたことだろう。(Hardt and Negri 2000=2003: 357)

ここに見られるのは、「経済的現象と文化的現象とが現実ますます識別不可能になりつつあるという事態」(Hardt and Negri 2000=2003: 356)である。ハートらは、権力配置の変化が、その外側にある生産形態によって引き起こされたとは考えていない。むしろポストフォーディズムへの移行それ自体が、権力の配置の内部からもたらされたとするのである。

第二の点は、彼らが、グローバルな管理社会の

メカニズムとして、主権と資本の矛盾した作動に言及している点である。ここで、〈帝国〉論はフォーコーの統治性の研究と深く通じるのだが、詳しくは次節で検討しよう。

3. 戦術としての統治

(1) 主権と統治

ハートとネグリは、主権と資本について次のように述べる。

近代的主権は、根本的に主権者——君主であれ、国家であれ、国民であれ、あるいは〈人民^{ビープル}〉ですらも——の社会的平面からの超越に依拠している。……だが資本はこれとは逆に、権力の超越的中心に頼ることなく、支配の関係の中継やネットワークをとおして内在性の平面上で作動している。(Hardt and Negri 2000=2003: 413-4)

前者は固定的な境界を維持することによって作動するが、後者は「伝統的な社会的境界を破壊する傾向がある」(Hardt and Negri 2000=2003: 414)。「近代性の総体的歴史」とは、両者の「矛盾をうまく切り抜け媒介しようとする試みの発展」であるのだが、その歴史的過程の現実は「主権の超越的な立場から資本の内在性の平面へと向かう一方的な運動」であった(Hardt and Negri 2000=2003: 415)。ハートらはこうした関係こそが「すべての資本主義国家の理論が立ち向かわなければならない中心的な問題設定」(Hardt and Negri 2000=2003: 416)だという。

規律について考えてみると、それは外的な強制力ではなく、「主体性それ自体に内在的」(Hardt and Negri 2000=2003: 417)なものである。しかし、規律はそれを可能にする諸制度(学校、工場、監獄等)によって超越的な主権の審級と接合されていた。だが、「管理社会への移行においては、規律

社会の超越的な諸要素が衰退するのと同時に、内在的な側面がきわだち、かつ全般化するのである」(Hardt and Negri 2000=2003: 419)。資本主義社会は、ある時期までは主権を利用することで資本を拡大したが、最終的には、資本の論理だけで成立するようになるということだ。

ところで、主権の超越性と資本の内在性というこの問題設定は、フーコーのいう主権(souveraineté)と統治(gouvernement)という考えに非常に近い⁽⁵⁾。もっとも、フーコーにおいては決して「資本」という言葉は使われない。フーコーは「統治」を「他者の行動の可能的な領野を構造化すること」(SP2: 301)と広く定義しており、したがって、それをあくまで権力の問題として把握するのである。

フーコーによれば、「主権」とは領土に準拠するものであり、主権者の単一性と超越性に特徴づけられ、その道具は法である。他方、「統治」は、領土ではなく事物と人間を対象とし、統治者の多数性と内在性をその特徴とし、戦術を用いる。彼は、主権の定義をニコロ・マキャヴェッリの『君主論』から、そして、統治の定義をギヨーム・ド・ラ・ペリエールらに代表される「反マキャヴェッリ」的な文献から導き出している。ここでフーコーの理論的作業を敷衍することはできないが、法と戦術という語については確認をしておいた方がよいだろう。主権は「共通善」を目指す、統治は「統治すべき対象であるあれらの事物すべてにとってそれぞれふさわしい目的へと」導いていくものである(STP: 122)。統治の目的はそれぞれに応じて複数あるため、「統治の道具は法ではなく、さまざまな戦術」となる(STP: 123)。

フーコーはそれまでも、法に対して戦術という用語を使っていたが、とくに『監獄の誕生』において規律訓練が戦術と称されていたことは重要だ。彼は、法と戦術のせめぎ合いをしばしば描いている。彼の権力論では、法は徐々に衰退し、かわりに戦術の利用が拡大すること、つまり、主権から統治へ

と移行することが歴史的に明らかにされていた。

主権から統治への——超越性から内在性への、法から戦術への——移行は、早くは16世紀の国家理性の時代に見られる。だが、統治の技法は、18世紀までは固有のものとして発展することはなかったという。なぜなら、統治は、一方では、主権という抽象的で硬直的な枠組みのなかに組み込まれてしまったり、他方では、一家の長が家族を統治するというような狭く脆弱な家族モデルに押し込まれてしまったりしていたからだ。主権や家族とは区別されるものとして、統治が固有に主題化されるには、18世紀に入って、人口問題が出現するのを待たなければならなかった。統計学によって「人口には固有の規則性がある」こと、「人口にはその集合のありかたに固有の効果があり、それは家族の見せる効果には還元できない」こと、そして「人口にはその移動や行動のしかたや活動によって特有の経済的効果があるということ」が明らかにされ、人口が固有の問題として浮かび上がる(STP: 128)。以降、統治の目標は「人口の境遇を改善すること、人口の富・寿命・健康を増大させること」(STP: 129)となる。人口集団の統治は、「人口を構成する個々人の意識としての利(intérêt)と、人口の利としての利(intérêt)」(STP: 130)へと向かうことになったのである⁽⁶⁾。

(2)自由主義的統治とは何か

18世紀の中頃に起こった、法的主体とは異なる「人口」という主体の政治の場への登場は、いうまでもなく「生政治」の出現を意味している。フーコーは『知への意志』において、生に対する権力(生権力)を支える2つの極として、17世紀以来の「人間の身体解剖-政治学」(規律訓練)と18世紀中葉に形成された「人口の生-政治学」を挙げている(VS: 176)。その翌年の講義で、彼は、生政治の「より一般的体制」として「自由主義」を取り上げることとなる(NB: 28)。「自由主義と呼ばれるこの統治

の体制がどのようなものであるかを知ったとき、生政治がいかなるものであるかを把握することができるように、私には思われる」(NB: 28)とフーコーは述べる。

自由主義とは、「一つの理論ないし一つのイデオロギー」でもなければ『『社会』が『自らを表象する』一つのやり方』(NB: 392)でもない。自由主義は、「統治の行使を合理化するための原理および方法」(NB: 392)として、すなわち、政治的合理化の原理として分析されなくてはならない。フーコーが、合理化の原理としての自由主義というとき、それは国家理性との対比で捉えられている。自由主義的合理化は、端的に言えば、コスト削減と社会への言及によって特徴づけられる。自由主義は、「コスト(経済的かつ政治的な意味で理解されたコスト)を可能な限り削減しつつ、その諸効果を最大に高めることを目指す」(NB: 392)。この点は国家理性と同様である。だが、16世紀以来の国家理性は、統治の目的を「国家の存在とその強化」に求めており、そこには常に「統治が少なすぎる」という原理が貫いていた(NB: 392)。これに対して、自由主義は「常に統治しすぎている」という原理によって貫かれている(NB: 393)。なぜなら、そこで参照されるのは「国家」ではなく、「国家に対して外部的かつ内部的な複合関係にあるものとしての社会」(NB: 393)だからである。「社会」という新しい観念が、「統治しすぎているのではないか」「統治は何にとって有用なのか」「統治は必要なのか」という問いを提起するのである(NB: 392)。

ところで、自由主義における「自由」とは何か。それは、私たちがあらかじめ保持している原初の権利で、自由主義によって保証されたりするものなのだろうか。フーコーは、そうではないという。むしろ、自由主義が、自由を生産し組織化し、それと同時に自由を制限するのである。

自由主義体制における自由は一つの所与ではありません。自由は、既成の区域として尊

重しなければならないようなものではありません。……自由、それは、絶えず製造されるような何かです。自由主義、それは、自由を受け入れるものではありません。自由主義、それは、絶えず自由を製造しようとするもの、自由を生み出し生産しようとするもののなのです。(NB: 79-80)

自由主義における「自由」は所与のものではなく、製造されるものであるが、それには「自由の製造によって提起される制約の問題、コストの問題」(NB: 80)がつきまとう。したがって、自由主義は、個人や集団の利害関心(intérêt)が、どの程度まで、個人や集団にとって危険ではないのかという「安全の問題」(NB: 80)と切り離すことができない。あるときは、個別的利害関心に対して集団的利害関心を保護しなければならないし、また逆に、集団的利害関心に対して個別的利害関心を保護しなければならないときもある。いずれにせよ、「利害関心のメカニズムが個人に対しても集団に対しても危険を引き起こすことのないよう警戒」(NB: 80)しなくてはならない。自由主義的統治は、自由を製造するのと同時に、安全の戦略にもとづいて、その自由を制限し管理するのだ。「自由主義は、個々人のあいだの自由と安全を、危険というあの観念を中心にして絶えず仲裁しなければならないようなメカニズム」(NB: 81)である。危険は、戦争や死といった「大いなる脅威」ではない。そうではなくて、病や衛生状態、セクシュアリティのもたらすこと、家族や個人のあり方の変容、将来の生活への不安といった、日常的な危険である。自由主義はあらゆるところに危険キャンペーンをはりながら、それによって自由と安全を運営するのだ。

自由主義的統治の先駆けを、刑罰の歴史にたどるのであれば、それはパノプティズムを用意した18世紀の司法改革に見られる。かつての身体刑は君主による報復であったが、改革以降、処罰は社会のためになされるようになった。そして刑罰の

残虐性が減少したのは、人々の感受性の変化というよりもまず、刑罰の経済的合理性のためであった（SP1: 92-105）。社会のための、低コストの刑罰がここに出現していたのである。

4. ホモ・エコノミクス

（1）利害関心の主体と法的主体

『監獄の誕生』において、以上のように分析されていた刑罰の緩和について、フーコーはのちに、「私の以前の分析よりもよいやり方で分析を行うなら」（NB: 57）として、次のようにいえるという。

犯罪と、それを処罰する法権利を持ち場合によってはそれを死刑に処す法権利を持つ主権の権限とのあいだに、利害関心の現象という薄膜が置かれたのであり、以後それが、統治理性が影響力を及ぼすことのできる唯一のものになるのだ、と。（NB: 57）

処罰は、以後、「処罰することに利害関心が見いだされるだろうか。……処罰は、それが社会にとって利害関心を見いだしうるものとなるためには、どのような形態をとらなければならないのか。……再教育を施すことに利害関心が見いだされるのだろうか。……それにはどれくらいのコストがかかるだろうか」（NB: 57）といった人びとや社会の利害関心のなかにのみ根づくものとなるのである。

それでは、統治が介入しうる唯一の範囲としての「利害関心」、また、その出発点としての「利害関心の主体」とは何だろうか。フーコーは「少々恣意的な切り抜き方」（NB: 334）であると前置きをしたうえで、それがイギリス経験論とともに出現したと指摘する。イギリス経験論の主体は、「還元不可能であると同時に譲渡不可能であるような個人的選択の主体」（NB: 334）である。還元不可能であるとは、個人の選択が、究極的には「つらいものであるかそうでないかという」（NB: 335）判断に依拠してい

ることである⁽⁷⁾。譲渡不可能な選択とは、「つらいかつつらくないか、つらいか心地よいかに関する私の感情こそが、最終的に、私の選択の原理となる」（NB: 335）ということである⁽⁸⁾。

したがってこれは、主体との関係において還元不可能な選択であり、譲渡不可能な選択です。個人的で、還元不可能で、譲渡不可能な選択の原理。原子論的で無条件に主体自身に準拠する選択の原理。この原理こそ、利害関心と呼ばれるものです。（NB: 336）

利害関心をこのように定義し、フーコーは、利害関心の主体を法的主体と対比させる。人が法的主体となるのは、最初にもっていた自然権を譲渡し放棄することを受け入れたときである。一方で、利害関心の主体になるためには、何も放棄しなくてよい。それどころか、経済学者たちが示したことによれば、個人の利害関心に任せておけば、それはおのずと他の人びとの利害関心と調和するし、個人の利害関心を強化することこそが、全体の利益を増大する、とさえいえるのである。かくして、経験論と経済学とが交差するこの地点に、法的主体とは全く異質な一つの主体を定義することができる。それは、「利害関心の強化そのものによってその行動が増大と有益性をもたらすようなものとしての利害関心の主体」、すなわち、「ホモ・エコノミクス」である（NB: 340）。

ホモ・エコノミクスは、いうまでもなく、アダム・スミスの「見えざる手」の理論の住人である。そして、この主体は、主権者に対して根源的な異議申し立てを行い、主権者からその価値を剥奪するものでもある。なぜなら、「見えざる手」の理論において絶対に必要なのはその「不可視性」だからである。つまり、ポジティブな集団的結果のためには、不可視性が、あらゆる主体にとって——主権者にとっても——絶対に必要であることを意味している。主権

者は「無知でなければならない」(NB: 346)のだ。

自由主義が始まったのは、まさしく、一方では利害関心の主体、経済主体を特徴づける全体化不可能な多数多様性と、他方では法的主権者の全体化する統一性とのあいだの、本質的な両立不可能性が定式化されたときなのです。(NB: 347)

『監獄の誕生』から一貫してフーコーが取り組んでいたのは、規律訓練のテクノロジーの反法的性質や、契約理論が唱える法的主体に対する規律訓練上の個人の過剰であった。私たちはここで、それらがまさしく自由主義の問題であったのだと理解できる。

自由主義の問題として捉え直された刑罰の変遷は、フーコーによって以下のように説明される。18世紀末から19世紀初頭の司法改革は、初めてコストを問題とした。権力を、経済学的な合理性の眼でチェックしたのである。そして「コストができる限り低くなるような刑罰システム」の構築にあたって、改革者たちが選択したのは、「法律尊重主義的解決法」とでも呼べるものであった(NB: 305-6)。「よい法律」の存在と適用が「最も経済的な解決法」というわけだ(NB: 306)。ここでは人は、「ホモ・レガリス」(法的人間)であり「ホモ・ペナリス」(法によって科刑されうる人間)であるが、その法の内実が経済原理であったという意味では、「ホモ・エコノミクス」でもあった(NB: 308/ 306)。

しかし、こうした解決法は、矛盾に突き当たることとなる。チェザーレ・ベッカリーアやジェレミ・ベンサムが夢見たような、法の内部に功利性を完全に具現化しようとする計画は頓挫する。というのも、法は行為に向かうのに対し、処罰は個人に向かうことしかできないからだ。「行為との関係を規定する法律の形式と、個人しか目指すことのできないものとしての法律の実際の適用とのあいだ」の矛盾が、「法

律の適用をますます個別的に変調し、そしてその結果、今度は法律を適用される者を心理学的、社会的、人間学的に問題化」する(NB: 307)。こうして、犯罪の人間学によって取り上げ直されるのはもはや「ホモ・レガリス」ではなく「ホモ・クリミナリス」(NB: 307)である。19世紀の刑罰システムにおいて問題となっていたのは、法と規律訓練の矛盾、違法行為と非行性の矛盾であったが、それも、結局のところ法的主体と経済主体の両立不可能性に端を発しているのだ。

(2)新自由主義の時代における「ホモ・エコノミクス」

『監獄の誕生』においては触れられていないことだが、フーコーは1979年の講義のなかで、犯罪問題のその後について詳しく語っている。つまり、前述したような自由主義の問題が、その後、新自由主義者たちによってどのように展開されたのかを説明しているのだ。

フーコーは、ゲーリー・ベッカーの『犯罪と処罰』を引きながら、次のように述べる。

〔ベッカーの分析は、〕結局のところ、ベッカリーア的、ベンサム的な功利的選り分けを再び行おうとするものですが、ただしそれを、ホモ・エコノミクスからホモ・レガリス、ホモ・ペナリスへの移行、そして最終的にはホモ・クリミナリスへの移行をもたらしたあの一連の地滑りを可能な限り〔避け〕ようと試みつつ行おうとするものです。純粋に経済学的であるような分析によって、可能な限りホモ・エコノミクスにとどまること。(NB: 308, [] 内は編者による補足)

新自由主義は、経済性を法によって翻訳しようという不可能な夢を捨て、純粋に経済学的問題として犯罪を分析する。ベッカーは、「違法行為を抑止する最適な公共政策や私的政策などを解明するために経済分析を使って」(Becker 1968=2005:

570) いるが、その際、犯罪を犯罪者(もしくは犯罪を犯すであろう者)にとって「割に合うか、割に合わないか」という観点から取り扱っている。ここにあるのは、犯罪に対する客観的な視点ではなく、犯罪者自身の視点である⁽⁹⁾。

こうした個人的主体の側への「視点の移動」(NB: 310)は、新自由主義の「人的資本論」に見られるのと同じタイプのものであると、フーコーはいう。人的資本論は、人間の能力を投資の対象とする考えだが、そこで採用されているのは労働者の視点である。人的資本論は、「労働を、労働する者自身によって実践され、活用され、合理化され、計算される経済的行いとして研究」(NB: 275)する。それは古典的な経済分析が、労働を経済のメカニズムのなかの歯車へと「抽象化」すること(労働をもっぱら時間と力に還元すること)に対する理論的批判でもある。そして労働者の視点に立つとき、「賃金とは、自らの労働力の売値ではなく、所得である」(NB: 275)。そして所得の源泉は、「それを保持している者から分離することの不可能な資本」すなわち、「能力資本」である(NB: 276-7)。

ところで、自身の能力資本を投資して賃金を受け取るような労働者は、古典的な意味でのホモ・エコノミクスではない。それはもはや、有用性の理論に従ってたんに交換する人間ではない。「ホモ・エコノミクス、それは、企業家であり、自分自身の企業家」つまり、「自分自身に対する自分自身の資本、自分自身にとっての自分自身の生産者、自分自身にとっての[自分の] 所得の源泉としてのホモ・エコノミクス」である(NB: 278, [] 内は編者による補足)。では、この人的資本はどのように構成され、蓄積されるのか。新自由主義者たちによれば、人的資本は「先天的諸要素と後天的諸要素」(NB: 279)からなる。前者は結婚や出産によって、後者は主に「教育投資」(NB: 282)によって増大したり、改良されたりする。教育投資にあたるのは、学校での学習だけではない。「単なる授乳の時間、両親によって

その子供たちに割かれる単なる愛情の時間」、教養のある両親による「文化的刺激」といったすべてが、人的資本への投資という観点から捉えられるようになるのである(NB: 282)。こうして、新自由主義者たちは、「ホモ・エコノミクスという格子、図式、モデルを、経済的行為者に適用するだけでなく、社会的行為者一般にも適用する……、たとえば、結婚したり、犯罪を犯したり、子供を育てたり、自分の子供たちに愛情を与えたり一緒に時間を過ごしたりする者としての、社会的行為者一般にも適用」(NB: 330)するのである。

かつて、犯罪者や労働者が統治可能となるには、法が必要であった。「よい法律」による経済的な解決が目指されていた時代にはもちろんのこと、規律の時代においてもそうであった。個人に向かう個別化する規律訓練のテクノロジーは、監獄や工場という装置をつうじて全体化する法的権力と媒介されていたからだ。新自由主義的な統治においては、法は必要とされない。「個人が統治化可能となるのは、つまり個人に対する影響力の行使が可能となるのは、個人がホモ・エコノミクスである限りにおいて」(NB: 310)である。

こうして、自由主義によって、統治の可能な介入範囲として発見された人びとの利害関心は、新自由主義において完全な内在化を遂げる。18世紀のホモ・エコノミクスは、「権力の行使に対し、触知不可能な要素」(NB: 333)として現れていた。しかし、20世紀のホモ・エコノミクス、自分自身の企業家としてのホモ・エコノミクスは、「すぐれて統治しやすい者」(NB: 333)である。それは触知不可能な相手でもないし、「自由の原子」(NB: 333)のようなものでもない。そうではなくて、それは、統治の技術の「相関物」(NB: 333)である。

5. おわりに

新自由主義的グローバリゼーションのなかで、私たちは、露骨な資本の論理から逃げる事ができな

いように思われる。たとえ、どんなに高尚な理論をふりまいてみようと、損得勘定に勝つことはできないのだから……。こうした閉塞感は何に由来するのだろうか。それは、利害関心という原理が、あらゆる個人にとって本質的で原初的なもの——たとえば、社会契約以前の「自然権」のようなもの——であるという諦めからくるのではないだろうか。

フーコーの自由主義についての講義は、こうした閉塞感を打開するためのひとつの道筋を示してくれるように思われる。『生政治の誕生』は、フーコーが現代史を語った唯一の講義録であり、とくに新自由主義についての言及があることから、私たちにあって貴重な書物である。と同時に、それは、フーコーの過去の仕事を総括するものとしても意義深いものである。とりわけ『監獄の誕生』や『知への意志』といった権力論におけるフーコーの試みを「自由主義」というフレームで再読するとき、フーコー理論の新しい射程が見えてくる。規律訓練と法の矛盾という問題はまさしく、主権と統治、もしくは、法的主体と利害関心の主体の両立不可能性という自由主義の問題として読み直すことができる。生政治は、統治の対象を法的主体ではなく、個人や人口集団の利害関心に定めた統治形態として理解される。

そして、私たちにとって最も示唆的なのは、フーコーがそうした歴史的な研究から、利害関心という現象が原初的なものでも本質的なものでもないとしたことである。フーコーは、それをむしろ、近代の幕開けとともに登場した観念として、自由主義的統治の相関物として描き出した。新自由主義的統治が、利害関心の原理を個々人に完全に内在化することを目指しているというフーコーの指摘は、恐ろしくも確からしく思われる。しかし、利害関心を内在化した主体とは、そこで思考が中断を余儀なくされるような最終的な何かではない。私たちに賭けられているのは、そうした利害関心がいかにして個々人に内在化するのか、どのような権力の配置がそれを可能にしているのか、そこでの新たな主体化の

様式とはいかなるものなのかといった問題を忍耐強く追っていくことである。

【注】

- (1) ドゥルーズ自身は、「フーコーは、規律社会とは私たちがそこから脱却しようとしている社会であり、規律社会はもはや私たちとは無縁だということ」を述べた先駆者のひとりなのです」と述べている(Deleuze 1990=1992: 288)。
- (2) ハートらは、〈帝国〉をいわゆるアメリカニゼーションと区別している。アメリカは確かに〈帝国〉のなかで覇権を握ってはいる。しかし「じつさいかなる国民国家も、今日、帝国主義的プロジェクトの中心を形成することはできないのであって、合衆国もまた中心とはなりえないのだ」(Hardt and Negri 2000=2003: 6)。
- (3) しかし、ハートらは、「グローバルな経済のなかの従属地域においては、それらはけっして〔支配諸国と〕同じかたちでは実現されなかった」(Hardt and Negri 2000=2003: 322) ことに注意を向けている。従属的経済は「グローバルなシステムのなかで従属的なままでありつづけるのであり、したがってけっして約束された支配的な経済形態、つまり先進国型の経済形態には到達しないという意味なのである」(Hardt and Negri 2000=2003: 366)。
- (4) フレイザーはフレキシビリゼーションへの移行を1989年に、ネグリは〈帝国〉の出現を1970年ごろに位置づけており、両者の時期は完全には重ならない。しかし、1970年代以降に進展したポストフォーディズム的な諸現象が頂点を迎えた地点として、1989年を捉えるのであれば、両者のズレはさほど重要ではないだろう。
- (5) ハートらは、自身のいう主権から資本への運動を、フーコーのいうところの「『主権』(君主の意志や人格を中心とした主権の絶対的形態)

から『統治性』（財と人口の支配や管理の脱中心的な配分^{エコノミー}をととして表現される、主権の形態）」への移行(Hardt and Negri 2000=2003: 415-6)と重なるものとしている。そのとき彼は、主権と統治性の双方をと「近代的主権のパラダイム」であるとし、そのどちらもが「資本の発展にとって最終的には克服されるべき障害」であるという(Hardt and Negri 2000=2003: 416)。しかし、フーコーにおいては、統治性は主権のパラダイムではないし、資本の論理それ自体でもない。

(6) フーコーは、権力の対象として人口が構成されたことと、「政治経済学」という新しい知の領域が開かれたことの相補性に注意を促す。「人口が権力の諸技術の相関物として構成されたことを出発点としてこそ、さまざまなありうべき知についての対象の領域が開かれた。そしてひるがえって、人口が近代の権力メカニズムの特権的な相関物として自らを構成・継続・維持しえたのは、このような知がたえず新たな対象を切り出したからなのです」(STP: 95)。

(7) フーコーは、ここでデビッド・ヒュームの以下の文章を参照している。「人間の行為の究極的な目的は、いかなる事例においても決して理性によって説明されうるものではなく、知的な諸能力に何ら依存するところのない人類の感情と情緒とに、完全に委ねられているものであることは明白と思われる。或る人に、何故彼が運動するのかを尋ねてみよ。彼は、自分の健康を維持したいからと答えるであろう。もしも諸君がさらに、何故彼が健康を欲するのかを問うならば、彼は即座に、病気は苦痛であるからと答えるであろう。もし諸君が、それ以上に質問を押し進めて、何故彼は苦痛を嫌うのか、その理由を求めらば、彼がこれに対して、何かを答えることはありえない。これは窮極的な目的であり、他のいかなる目標にも決して帰せられないのである」

(Hume 1951=1993: 165)。NB: 335および、NB: 354(編者注14)も参照。

(8) フーコーは、ここでもヒュームを引いている。フーコーいわく、「自分の小指の切り傷と他人の死とのあいだで私が選択を迫られるとき、小指を傷つけることが私に対して強いられることはあるとしても、自分の小指の切り傷が他者の死よりも好まれるべきであるという考えを私に強いることができるものは何もない……」(NB: 335-6, cf. NB: 354 [編者注15], Hume 1896=1951(3): 206)。

(9) フーコーはここで、ベッカーが、犯罪を「個人に対し、刑罰を科されるリスクをもたらすような行動のすべて」(NB: 338)と定義していると述べる。しかし、ベッカーの論文にはこうした記述はない(Becker 1968=2005, cf. NB: 322 [編者注25])。しかし、ベッカーの論文にはたしかに、犯罪者の視点から犯罪にアプローチする手法が多くみられる。

【文献】

※日本語訳がある場合には、基本的にはそれを参照したが、引用に際して、適宜、表現を変更した。なお、引用文中の〔 〕内は引用者による補足である。

○略号一覧(略号のアルファベット順)

※フーコーの著作を引用する際には、以下の略号を使用し、日本語訳の頁数を記した。

NB : *Naissance de la biopolitique: cours au Collège de France (1978-1979)*, 2004, édition établie par Michel Senellart, Seuil/Gallimard.(=2008, 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度』(ミシェル・フーコー講義集成Ⅷ) 慎改康之訳, 筑摩書房.)

SP1 : *Surveiller et punir: naissance de la*

- prison*, 1975, Gallimard. (=1977, 『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳, 新潮社.)
- SP2: *The Subject and Power*, *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, 1983, H. L. Dreyfus and P. Rabinow (eds.), The University of Chicago Press, 208-26. (=1996, 「主体と権力」山形頼洋・鷺田清一他訳『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房, 287-307.)
- STP: *Sécurité, territoire, population: cours au Collège de France (1977-1978)*, 2004, édition établie par Michel Senellart, Seuil/Gallimard. (=2007, 『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』(ミシェル・フーコー講義集成Ⅶ)高桑和巳訳, 筑摩書房.)
- VS: *La volonté de savoir, histoire de la sexualité I*, 1976, Gallimard. (=1986, 『性の歴史I——知への意志』渡辺守章訳, 新潮社.)
- Hardt, M. and A. Negri, 2000, *Empire*, Harvard University Press. (=2003, 水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社.)
- Hume, D., 1896, *A Treatise of Human Nature*, L. A. Selby-Bigge (ed.), Clarendon Press. (=1948/1949/1951/1952, 大槻晴彦訳『人生論(1-4)』岩波書店.)
- , 1951, *Enquiry concerning the Principles of Morals*, L. A. Selby-Bigge (ed.), Second Edition, Clarendon Press. (=1993, 渡部峻明訳『道德原理の研究』哲書房.)
- Lemke, T., 2003, “Comment on Nancy Fraser: Rereading Foucault in the Shadow of Globalization,” *Constellations*, 10(2): 172-9. (=2003, 高橋明史訳「ナンシー・フレイザーにたいするコメント」『現代思想』31(16): 40-8.)

○その他の文献

- Becker, G. S., 1968, “Crime and Punishment: An Economic Approach,” *Journal of Political Economy*, 76(2): 169-217, University of Chicago Press. (=2005, 増田辰良訳「犯罪と刑罰——経済学的アプローチ」『北海学園大学法学研究』41(3): 606-558.)
- Deleuze, G., 1990, *Pourparlers*, Minuit. (=1992, 宮林寛訳『記号と事件——1972-1990年の対話』河出書房新社.)
- Fraser, N., 2008, *Scales of Justice: Reimagining Political Space in a Globalizing World*, Polity Press. (=2013, 向山恭一訳『正義の秤——グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』法政大学出版局.)